

Contents *****

特集：米中間選挙はセンターラインに注目！	1p
＜海外報道ウォッチ＞	
クック・レポートが伝える終盤情勢	7p
＜From the Editor＞　カンザス州は岩手県？	8p

特集：米中間選挙はセンターラインに注目！

米中間選挙まで残り 3 週間を切りました。ここへ来て驚くのは、カンザス州やネブラスカ州など、以前であれば「無風」であったレッドステーツで異変が起きていること。既に話題になっているテキサス州と併せると、「米国のセンターライン」で共和党が苦戦していることになる。これはいかなる現象でありましょうや。

特にカンザス州に焦点を当ててみると、意外な事実が次々に浮かび上がってきます。米国の歴史は短いようで長く、浅いようで深い。ここで起きている現象は、短く言えば 20 年ぶり、長く見渡せば 1 世紀ぶりの地殻変動ということになる。やはり 2026 年中間選挙は米国政治の分水嶺になるのではないか、という予感がしてくるところです。

●「カンザスで何が起きているのか？」

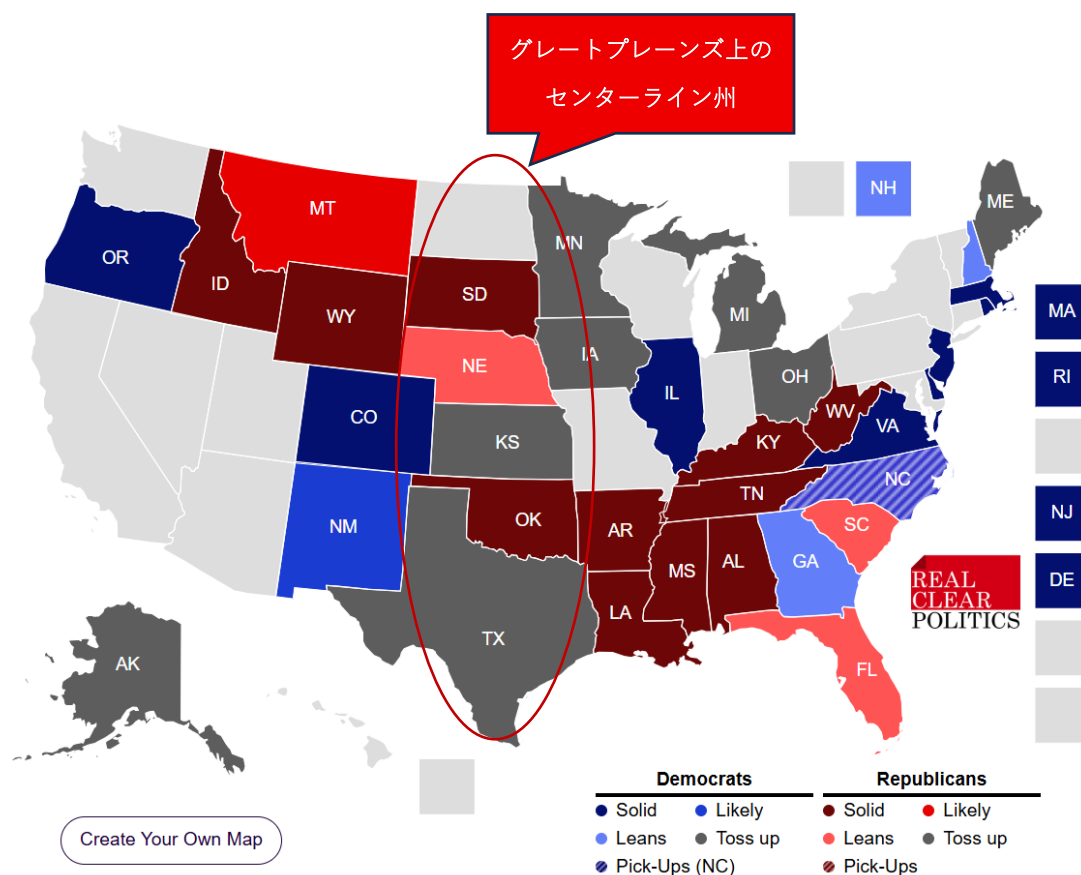
“What’s the matter with Kansas?” という名著がある。カンザス州出身の政治・歴史学者であるトーマス・フランクが、2004 年に「カンザスよ、お前はどうしたんだ？」と呼び掛けた著書である。19 世紀末には農民反乱や人民党の興隆など、「権力や大資本に歯向かうポピュリストの聖地」であったカンザスが、なぜ 20 世紀末になって急速に保守化したのか。同書はベストセラーとなり、政治論議に一石を投じたものである。

同書曰く。共和党の「文化戦争」路線が奏功し、経済的に恵まれない層が支持するようになっている。ただし共和党の政策は、彼らの経済的利益には反するはずである。実際に 2004 年の大統領選挙では、GW ブッシュ政権が「カール・ローブ戦略」に沿って、「同性愛反対」や「宗教的価値」を打ち出し、民主党のジョン・ケリーの挑戦を退けた。

他方、民主党はクリントン政権下で金融や IT 業界への接近が進み、労働者層（ブルーカラー）を見捨てて、「高学歴者の政党」になりつつあった。当時は反論も多く出て論壇を賑わせたが、本書はその後「トランプ現象」を予言したとも言えるだろう。

それとはまったく別の意味で、**2026年は再び”What’s the matter with Kansas?”と問わねばならない**。下図はRCPによる「米中間選挙の上院選マップ」であり、全米で8つの州が”Toss Up”（グレーで表記）になっている。

何といても違和感を覚えるのは、**米国のセンターライン（ND～SD～NE～KS～OK～TX）が「赤く」染まっていない**ことである。カンザス州（KS）とテキサス州（TX）がめずらしく”Toss Up”になっていて、さらにネブラスカ州（NE）でも無所属候補が健闘し、共和党候補は盤石でなくなっている。こんな政治地図は、今だかつて見たことがない。



米国のセンターライン州には、グレートプレーンズと呼ばれる大平原が広がっている。なだらかな土地であり、西のロッキー山脈が湿った空気を遮るので空気は乾燥している。夏は暑く、冬は寒い。ネイティブ・アメリカンの故郷であり、西部開拓の歴史がある。現在は大規模農業が行われ、小麦や牧畜が盛んである。

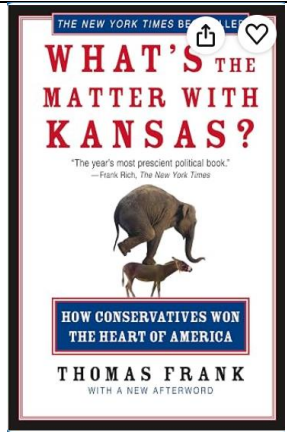
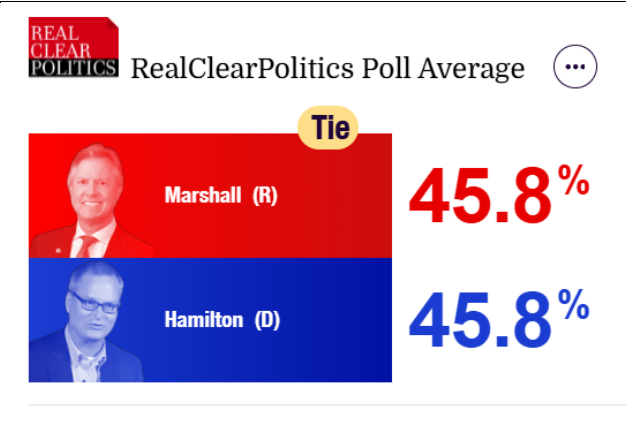
政治的にはレッドステーツ（保守州）である。キリスト教的価値観が強く、家族や伝統を重んじる気風がある。農業や牧畜、エネルギー産業が中心であるため、政府による規制や介入を嫌い、小さな政府、自由なビジネスや減税といった政策課題が好まれる。生活環境や狩猟文化から、銃の所有権を守る意識も強い。ごく一部の都市部を除き、共和党支持が多い。2024年の大統領選挙では、**トランプ氏がカマラ・ハリス氏に16p差をつけて勝っている**。中間選挙で注目されるようなことなど、普通はあり得ない州なのだ。

●価値観はそのまま、経済政策だけ変えよう！

カンザスの異変がいかに急であるかは、The Cook Political Report の判定を見るとよくわかる（本号 P7～8 の「海外報道ウォッチ」でもご紹介している）。

従来であれば”Solid R”（共和党盤石）の地であったカンザスの上院選が、10 月 7 日には”Toss Up”（形勢不明）とされた。その前に”Likely R”（共和党優勢）から”Lean R”（共和党やや有利）に変更されたのは、そのわずか2週間前である。

米国選挙は基本的に 2 大政党による「ゼロサムゲーム」、もしくはシーソーゲームである。投票日直前に予想外の事態が起きると、形勢は急速に傾いてしまう。共和党上院はノースカロライナ州で予定していた選挙 CM を急きょキャンセルし、その資金をカンザスに投入することを決めた。すなわち NC を見捨てて KS にテコ入れする、という「守りの選挙」である。こういう「トリアージ」（緊急事態における優先順位付け）が起きるのも、米国選挙における終盤戦の見どころのひとつである。

2004 年の著作	10 月 10 日現在の RCP 世論調査
	

カンザス州の現職上院議員は、共和党のロジャー・マーシャルである。元産婦人科医で、MAGA 派に忠実な 1 期目議員だ。彼に挑戦しているのは、今年 2 月まで共和党支持者だったアダム・ハミルトンである。メソジスト教会の牧師さんが「家族・信仰・カンザス」というスローガンを掲げ、民主党候補者として互角の戦いを演じている。このところ「世俗化」が進んでいた民主党としては、めずらしいタイプの候補者と言える。

ハミルトン候補は、「自分の教会の信者は、35%が共和党員で、35%が民主党員で、残り 30%は無党派だ」と言っている。今どきめずらしい超党派、中道派のメッセージが有権者に受けている。かなり新しい事態が生じつつあるのだろう。

さらに面白いのは、ハミルトン候補が東海岸や西海岸からの大物民主党議員の応援を断っていることだ。確かにこんなところへ、カマラ・ハリスやチャック・シューマーが来ても効果は限定的だろう。むしろ「ハミルトンは民主党幹部の操り人形だ」という共和党のネガティブキャンペーンの好餌となるのが「落ち」である。

ここはテキサス州のジェームズ・タラリコにも共有する点だが、ハミルトン氏は「地元
の価値観はそのまま、経済政策だけを変えよう」と訴えている。そんなところへ、都会
から”Woke”（意識高い系）な政治家が来られては困るのだ。カンザスやテキサスで「環境
保護のためにビーフを食べるな」というメッセージほど愚かしいものはないだろう。

カンザス州から見れば、トランプ政権の経済政策は迷惑極まりない。まず関税戦争のため
に、彼らの農産物輸出が打撃を受けている。次にイラン戦争によるエネルギーや肥料価
格の高騰も、農家の経営に負担になっている。さらにトランプ政権は、物価上昇への場
当たりの対策として、アルゼンチンなどからの牛肉輸入を進めている。

要するに彼らの眼には、ワシントンの MAGA 政治のために、カンザスが犠牲になって
いる、と映っているわけだ。これで「文化戦争」という争点が引っ込めば、民主党として
も十分に勝機が出てくる。

●変化は「20 年ぶり」か「1 世紀ぶり」か？

個人的には、カンザス州選出の上院議員と聞いて思い出すのは、1996 年大統領選で共和
党候補者となったボブ・ドールである。初期の女性上院議員として「共和党の良心」と呼
ばれたナンシー・カッセンバウムもいた¹。実務家肌の大物議員を送り出す人材供給源、と
いうのがカンザスのイメージである。

もっと言えば、お近くのネブラスカ州（NE）やサウスダコタ州（SD）も大物議員を多
く輩出している。グレートプレーンズに広がる州は、農業が基幹産業である。農業州の政
治家は難しい。地元では「反・中央」を訴えつつも、ワシントンに行ったら予算を分捕っ
てこなければ話にならない。なおかつ人口が少ないから、選挙は勢い「人物本位」になる。
党の看板だけでは勝てない。従って政治家が鍛えられることになる。

カンザスの北隣のネブラスカ州でも異変が起きている。ここは共和党現職のピート・リ
ケッツ上院議員に対し、民主党が候補者を立てていない。そこへ無所属新人のダン・オズ
ボーンが挑戦し、ほぼ互角の戦いを演じている。この人、元は組合の委員長として地元の
工場ストを率いた「ブルーカラー・ポピュリスト」である。それが接戦となっているの
だから、民主党が「不戦敗」を決断したことが好判断となっている。おそらくはネブラスカ
の農家もまた、カンザスと同じ「怒り」を抱えているのであろう。

当地における過去 20 年余りの変化は実に興味深い。2004 年にはリベラル派の識者である
トーマス・フランクが、「文化戦争によって経済的利益を忘れた農民たち」の保守化を批
判し、返す刀で「労働者階級を見捨てた民主党幹部たち」を嘆いたものだ。

しかるに文化戦争が行きつくところまで到達すると、今度は「経済問題への回帰」が始
まっている。民主党も地方に都会の価値観を押し付ける愚を学習し、タラリコ氏やハミル
トン氏のような「宗教家候補者」が登場し、文化の問題を相対化している。2026 年の中間
選挙では、米国政治における新しい局面を観察することができるのではないだろうか。

¹ のちに駐日大使を務めたハワード・ベイカー上院議員・大統領首席補佐官の妻でもあった。

カンザス政治の話には、さらにもう一段の奥行きがある。実は”What’s the matter with Kansas.”という書名は、1896 年に書かれた有名な新聞社説から借用したものであった。新聞編集者のウィリアム・アレン・ホワイトが、急進主義に傾く 19 世紀末のカンザスを批判するために使ったタイトルだったのである。

19 世紀末の米国では、鉄道会社や銀行、大企業が強大な権限を持っていた。せつかく土地を得た農民たちは、鉄道会社に高い運賃を払わなければ農産物を出荷できなかった。そして土地を買うための借金により、銀行に高い金利を支払わなければならなかった。加えてしばしばデフレが発生したので、農産物価格の下落というリスクにも追われていた。

そこで農民たちは急進化した。カンザスは人民党運動など、ポピュリズムの中心地となった。彼らが要求したのは、鉄道運賃の規制や銀行制度の改革、そして通貨供給の拡大などである。当時、3 度民主党の大統領候補となり、3 度とも敗れ去った雄弁家のウィリアム・ジェニングス・ブライアンは、金本位制と東部の富裕層を厳しく糾弾し、「銀貨の鋳造量増加」というインフレ政策を主張したものである。

さらにそれに先立つ 19 世紀半ばの南北戦争以前の時代においては、カンザスはまだ準州であった。1854 年にカンザス・ネブラスカ協定が成立し、新しい準州が奴隷制を認めるかどうかは、住民の意思に委ねられることになった。カンザスは「自由州」を選択する。

すると、そこへ東隣のミズーリ州から奴隷制の支持者が組織的に流入してくる。北部からは反奴隷制の支持者がやってくる。ついには、双方の勢力が武装衝突を繰り返す「流血のカンザス」(Bleeding Kansas)という事態を招く。「米国のセンターライン」というと今では穏やかな農村地帯を思い浮かべるが、実は苛烈な過去を背負っているのである。

つまりカンザスは、昔から保守的だったわけではない。むしろ自分たちを脅かす外部の勢力に対し、果敢に立ち向かう風土があった。かつてはその矛先が奴隷制支持者に向かい、次に東部資本や鉄道会社と戦い、20 世紀末には「リベラルな文化エリート」が敵となった。そしてその都度、”What’s the matter with Kansas?”と問われてきたことになる。

そして今回の 2026 年中間選挙である。彼らの反骨精神は、「ワシントンの MAGA 政治」に対して噴き出すのかもしれない。

●ラストベルト、サンベルトに次ぐ「第 3 の主戦場」

中間選挙の投票日（11/3）に向けて、残された日々は少ない。

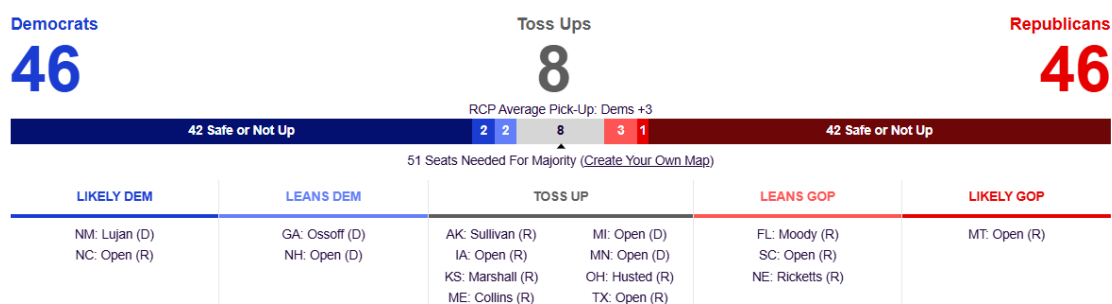
改めて調べてみると、期日前投票を認めていない州は 50 州中アラバマなど 4 つしかない。逆に 10 月 16 日現在で、カリフォルニアなど 19 州では既に投票が始まっている。さらにこの週末を超えて 10 月 19 日になると、テキサスなど 7 州でも投票が可能になる。

これでは仮に何らかの「オクトーバー・サプライズ」があったとしても、今の勢いは変えられないのではないか。ちなみにチャーリー・クック氏の表現（次ページ参照）を借りれば、現状は「ブルーウェーブではなく、赤い引き潮」であり、共和党は「惨敗するか否か」ではなく、「どれくらいの惨敗か」が問われるとのことである。

最後に上院選挙の最終情勢を確認しておこう。

RCP の”Battle for the Senate 2026”を見ると、以下の通り二大政党はそれぞれ 42 州が「安全圏もしくは選挙なし」であり、残り 16 選挙区の争いとなっている。特に 8 つの”Toss Up”州の動向如何ということになる。

○上院選挙区の情勢分析



勝負所を以下の通り分類しておこう。

- ① ラストベルト：MI ミシガン/MN ミネソタ/OH オハイオ
→ミシガンは新人エル＝サイード候補に注目。勝てば民主党左派の「スター誕生」となるだろう。オハイオで共和党が敗れば、ヴァンス副大統領の「2028 年戦略」に疑問符が付く。共和党としても、地元選挙区で勝てない大統領候補は願い下げだろう。
- ② サンベルト：GA ジョージア/NC ノースカロライナ/SC サウスカロライナ
→ジョージアの 1 期目民主党議員ジョン・オソフは既に安全圏で、2028 年大統領選の有力候補となりそう。ノースカロライナの共和党議席はほぼ絶望視されている。サウスカロライナはリンゼイ・グラハム上院議員急死の後を受けて、妹のダーライン・グラハムが候補者に担がれたが、いくら「弔い合戦」でも容易ではない。
- ③ センターライン：IA アイオワ/NE ネブラスカ/KS カンザス/TX テキサス
→アイオワもカンザス、ネブラスカと同じ農業州であり、トランプ関税とイラン戦争の被害を受けている。2020 年、24 年とトランプ氏が大勝利を収めた州だが、共和党現職引退後の防衛戦は苦戦中だ。そしてテキサスは 2026 年選挙最大の焦点。トランプ氏が既に 3 度も応援に現地入りしているが、負ければ党内の批判が噴出するだろう。
- ④ その他：AK アラスカ/ME メイン/NH ニューハンプシャー
→カナダと国境を接する州が次々に激戦となっている。カナダ向けの関税戦争はしみじみ悪手であったようだ。

2026 年選挙は、「センターライン」という第 3 の主戦場が誕生したことが新しい。①ラストベルトは「製造業の没落」、②サンベルトは「人口移動」、そして③センターラインは「農業州の反逆」である。ここを中心に観察していくべきだろう。

＜海外報道ウォッチ＞

クック・レポートが伝える終盤情勢

(観察対象：The Cook Political Report)

11/3 の投開票日に向けて、中間選挙の終盤情勢は大きく傾きつつある。お馴染みの The Cook Political Report は、10/7 に上院の 3 選挙区を民主党寄りに修正した。ジェシカ・テイラーの記事をご紹介します。” **A Senate Majority is Squarely in Democrats’ Sights as Kansas Moves to Toss Up; Two Other Races Shift Left**”² (カンザス州が接戦州へと移行する中、民主党は上院の過半数獲得を明確に視野に；他の 2 つの選挙区も左へシフト)。

- * 共和党の牙城とされる州でさえ、トランプ大統領が足かせとなっている。我々は民主党が獲得する議席数を 2～6 に変更した。**4 議席を越えれば過半数を得られる**。共和党はなおもミシガンとメインでの議席獲得に期待するが、残された時間は短い。
- * **カンザス州は Lean R から Toss up (接戦) へ**。まさにシンデレラ・ストーリーで、燃料と肥料価格高騰や牛肉輸入への農家の不信でトランプ支持基盤が侵食されている。
- * 今秋は中西部全体が共和党にとって頭痛の種だ。メソジスト派の牧師であるアダム・ハミルトンは民主党にとって最高の候補者だ。**共和党は 1 世紀ぶりにこの議席を失うかもしれない**。第 3 政党のリバタリアン党が 5% の支持を得ていることも波乱要因。共和党現職のロジャー・マーシャルは元産婦人科医で、未払い医療費で数百件の訴訟を起こしている。ハミルトンはこの点を攻撃しており、共感を呼ぶ可能性がある。
- * **ニューハンプシャー州は Toss up から Lean D (民主党寄り) へ**。民主党のパパス下院議員が、共和党のスヌヌ元上院議員にリードを広げている。スヌヌはイラン戦争や対カナダ関税で大統領と一線を画すが、狙い通り中道票を得られるかどうか。
- * **ノースカロライナ州は Lean D から Likely D (民主党有利) へ**。9 月末まで一縷の望みがあったが、上院共和党はカンザス州に資金を振り向ける。民主党のロイ・クーパー元知事は、「物価を下げよう」というシンプルなスローガンで主導権を握っている。

チャーリー・クック御大は、いつもの飄々とした筆致で終盤戦を評している。10/6 付コラム” **Stick a Fork in These Races**”³ (これらの選挙戦は決着がついたも同然) から。この選挙、負ければ共和党内ではトランプ氏の「オウンゴール」という評価になりそうだ。

- * 現状は「**ブルーウェーブ**」というよりは「**赤い引き潮**」だ。民主党イメージはなおも改善しておらず、目立った候補者の方が苦戦する傾向が続いている。

² <https://www.cookpolitical.com/analysis/senate/senate-overview/senate-majority-squarely-democrats-sights-kansas-moves-toss-two>

³ <https://www.cookpolitical.com/analysis/national/national-politics/stick-fork-these-races>

- * ここ6週間で共和党の展望は急激に暗転した。もはや「惨敗するか否か」ではなく「どれくらいの惨敗か」が問われている。本来は構造的な優位性があったはずなのだが。
- * 以前は接戦と見られていたジョージア州、ノースカロライナ州の上院選はもはや決定的な差がついた。いずれも、トランプが党内と連携できなかったことが原因だ。テキサス州も同様で、ジョン・コーニンが指名されていれば無難に議席を守れただろう。
- * 共和党の7議席が危うくなっている (NC/TX+AK/IA/ME/OH/KS)。先週公表されたNYT紙などの質の高い世論調査がそれを裏付けている。メイン州は共和党現職のクリンズが優勢かもしれない。民主党候補のタマが悪く、今ひとつ勢いを欠く。ミシガン州やミネソタ州でも、民主党はリスクの高い候補者を選んで苦労している。
- * 今年は「左対右」の構図ではない。民主党は「トランプが仕事をサボっている」と言えればいい。トランプはなぜか今頃「夏時間廃止」を主張している。ディーゼルや肥料が史上最高値となり、金利上昇で家やクルマに手が届かなくなっているというのに！

最後に 10/8 付のエイミー・ウォルターの解説を。” **Here’s the Difference Between a Bad Election Night for the GOP and a Catastrophic One**”⁴ (共和党にとって「不本意な夜」と「壊滅的な夜」の違い)。選挙戦後の共和党内は、かなり荒れるのではないだろうか。

- * 共和党の情勢は過去 20 年間でいちばん厳しい。選挙区割りや資金量など、構造的優位性はもはや消えた。共和党支持者の熱意は低く、ラテン系や無党派層の離反も痛い。そしてトランプに思い知らせてやる、という 民主党支持者の決意は衰え知らずだ。
- * 共和党としては、党に不満を持つ支持者を動員しなければならない。だが経済情勢は強力だ。イラン戦争の打撃は深い。ある共和党幹部は言う。「トランプは完全に浮いている。湾岸や舞踏会場などよりも、食料やガソリンが大事なんだ。馬鹿野郎」
- * 夏以降、状況は悪化している。共和党州でトランプ支持は 8~15p 下落し、上院候補者の支持は 11~14p 低下している。逆に民主党候補の支持率が上昇している。
- * 民主党の候補者たちは、既に共和党のネガティブキャンペーンを浴びている。だがそれに耐え抜き、肯定的に評価されている。2025 年 1 月時点で共和党员は 59%がトランプ、36%が党に帰属意識を有していた。それが 今では 34%対 56%に逆転している。
- * 共和党の望みは、投票意欲の低い支持層を世論調査が掴み損ねているか、党本部がうまく捉えていること。そして民主党候補の支持率が 46~49%に留まっていることだ。あるいは第三政党が、反・共和党票を分散させることくらいだろう。
- * ここ数回の選挙サイクルでは、ごく僅差の変化が勝利をもたらし、上下両院の議席をもたらしてきた。今日、選挙戦の舞台はここ数年で最大規模に広がっている。

⁴ <https://www.cookpolitical.com/analysis/national/national-politics/heres-difference-between-bad-election-night-gop-and>

<From the Editor> カンザス州は岩手県？

仲間内で米国政治のオタク談義をしているときに、みずほ総研の安井明彦さんがよくこんなことを言うんです。

「『大草原の小さな家』の最終回、覚えてますか？」

筆者は見えてないんですけども、ネット空間を検索してみると「『大草原の小さな家』の衝撃のラスト」は数多く言及されています⁵。なんと最終回、登場人物たちは自分たちの手で、愛するわが街を破壊してしまうのです。悪徳不動産屋に土地を乗っ取られたからとはいえ、自分たちの家や街並みをダイナマイトで吹き飛ばす。そして新しい開拓地を求めて去っていく。ものすごく強烈なエンディングです。

同じ時期の日本のドラマで言えば、『北の国から』の最終回で田中邦衛が演じる黒板五郎さんが、麓郷の森に火をつけてしまうような展開です。そりゃないよ、倉本聰さん。いや、さすがにそれはフジテレビが止めるよね。

ともあれ『大草原の小さな家』のラストは、観た者がトラウマになっても不思議ではありませぬ。安井さんはきっとリアタイで観て衝撃を受けたのでしょう。そして言うのです。

「**米国は本質的に過激な国なんです**」。あのドラマも、グレートプレーンズのどこかが舞台でしょうから、米国中西部はやっぱ過激なお土地柄なのです。

カンザス州というと、筆者の勝手なイメージでは「岩手県」になります。①農業州である、②大物政治家が出ている（首相は原敬、斎藤実、米内光政、鈴木善幸の4人。それ以外に後藤新平や小沢一郎など）。そして、③宮沢賢治や柳田國男など、民族の根幹に触れるような物語の土地、などが根拠です。

そしてカンザスと言えば、何といても『オズの魔法使い』。大平原に住む主人公ドロシーは、ある日、大竜巻に巻き込まれて不思議な「オズの国」に飛ばされる。そして愛犬トトに向かってこう言うのです。

「**ここはカンザスじゃないみたい！**」（**Toto, I've a feeling we're not in Kansas anymore.**）

そして彼女は、カカシとブリキの木こりと臆病なライオンを味方につけて、エメラルドの都に向かう。そして悪い魔女と対決する。

ところでこの物語には、「19世紀の米国経済をモチーフにした寓話」という解釈があるのだそうです。すなわち、こんな感じです。

- * ドロシー：米国の伝統的価値観
- * かかし：農民
- * ブリキの木こり：工場労働者
- * 臆病なライオン：ウィリアム・ジェニングス・ブライアン

⁵ ヤフーニュース「ダイナマイトで町を爆破!? Netflix版も話題の旧作『大草原の小さな家』が衝撃の最終回になった理由」<https://news.yahoo.co.jp/articles/a012b39aaf85e458b88066c47999a4f84a5c7a40>

- * 東の悪い魔女：グローバー・クリーブランド大統領
- * 西の悪い魔女：ウィリアム・マッキンリー大統領
- * オズ：金の単位オンスの略号（Oz）
- * 黄色いレンガ道：金本位制

いやもう、ちょっと奥行きがあり過ぎて筆者はついていけません。他方、宮沢賢治の作品群でも、この手の解釈ができそうに思える。『銀河鉄道の夜』や『注文の多い料理店』なんて、もろにそんな感じですからねえ。

- * 次号は 10 月 30 日（金）にお届けいたします。

編集者敬白

株式会社 溜池通信 吉崎達彦
〒105-0003 東京都港区西新橋 1-2-9 日比谷セントラルビル 14 階
<http://tameike.net> E-mail: kan@tameike.net